

海外の学校等視察調査データの分析法に関する検討 ： ナラティブ・アプローチの応用可能性

著者	川村 光, 加藤 隆雄, 紅林 伸幸
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	95-116
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000583/

海外の学校等視察調査データの分析法に関する検討
—ナラティブ・アプローチの応用可能性—

The Analysis Method of the Data Related to the Observation Research of
Overseas Schools:
The Applicability of a Narrative Approach

川村 光* 加藤 隆雄** 紅林 伸幸***
Akira KAWAMURA Takao KATO Nobuyuki KUREBAYASHI

抄 録

本論文の目的は、短期の海外の学校等の視察を組み入れた教育研究の可能性を検討し、その手法の一つとしてナラティブ分析を提示することである。まず、次のことを指摘する。日本教育社会学会の研究では、観察された海外視察データが実在として扱われている。したがって、そのデータは、観察された事実として記述された事象の社会的な意味を分析するためのものとして扱われていない。次に、海外視察データの分析方法として、視察した教育現実をその現地社会の教育に関する《語り＝ナラティブ》として読み解く、ナラティブ分析の視角を応用した研究手法を紹介する。

I. 問題の所在

社会のグローバル化の波は、教育研究にも及んでいる。例えば我が国の教育研究の基幹学会の一つである日本教育学会は、2006年より英文ジャーナル Educational Studies in Japan の刊行を開始した。また、筆者らの研究チームのメンバーの多くが研究活動の基盤学会として所属している日本教育社会学会も、2008年に国際活動ワーキンググループを立ち上げて学会の国際活動のあり方と国際部の組織の見直しを開始し、2010年より学会事務局に国際部を設置し、国際活動奨励賞の創設や会員の国際的活動への協賛、大会時における外国語セッションの特設部会の設置など、学会の国際活動を積極的に推進している。しかし、こうした教育研究のグローバル化は、歴史的な観点に立てば、決して特別なことではない。我が国の教育は、明治維新期の近代教育制度の確立時より、海外の制度をモデルとして効果のあるシステムを学び、制度を確立するとともに、海外のその時々の最先端の教育実践・教育研究の成果を取り入れて、国際的に最高水準の教育効果を実現してきた歴史を持つ。その意味ではそのスタート時点よりグローバルな観点を内包して、制度設計及び制度革

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

** 南山大学人文学部

*** 常葉大学大学院初等教育高度実践研究科

新を図ってきたと評することができるからである。海外に学ぶという教育研究の姿勢は現在も続いており、ゆりかごから墓場まで、ライフステージのあらゆる段階における我が国の教育改革案は、いずれも海外の優れた（と見做された）教育モデルをふんだんに盛り込んで構成されている。

こうした海外の制度や実践を学ぶタイプの教育研究は、それらの価値を、目標とする仮説的な社会像との距離や適合性において評価し、適切と判断したものを効果的な教育モデルとして採用する。この観点において重要なことは、目標点に位置づけられた社会像であり、教育のベースとなる現実の社会、即ち社会の現在の状態はそこに到達すべき未完成な社会として位置づけられる。つまり克服すべきものとしての意味しか持たないのである。同時に、同じ目標に向かって現在教育を展開している（というよりもそもそもその目標を設定した当事者である）海外の教育モデルから貪欲に学ぶことが正当化されることになる。言うまでもなく、この観点自体が、先進的な社会に追いつき、更に発展させるための手段として教育を利用し、一定の成功を収めてきたてきた我が国の教育研究に歴史的に埋め込まれた社会的刻印である。

現在の教育研究のグローバル化も優れた制度や実践のモデルを単純に取り入れるという特徴を持っているが、次のステージに入っているものと理解すべきだろう。教育研究のグローバル化の第2ステージは、海外の教育制度や教育実践がどのような社会的文化的文脈の中で採用され、どのようなspecificな社会的文化的意味を持っているのかを検討するものと言える。海外への移動が特別なことではなくなり、インターネットの普及により、書籍の国際流通が円滑化し、ネット上で様々な情報（文字情報だけでなく映像情報も、インタビュー・データすらも）を容易に入手できるようになったことで、誰もが海外の教育に関する膨大な現地情報を手にすることが可能になり、海外の教育制度や教育実践が特権的な研究の対象ではなくなったからである。当然このステージにおける研究は、海外の教育制度や実践を単に紹介すれば良いものではなくなる。膨大な現地情報をトータルにかつ多面的に再構成し、そこから多元的に意味を読みほどこき、社会的事実としての教育制度や教育実践の全体像を明らかにすることが必要となるのである。

教育研究の要請としてリアリティへの深い洞察が必要される一方で、私たち教育研究者も別の意味で、海外の教育を研究するスタイルについて転換を図ることを余儀なくされている。これは課程制をとっている以上当然のことだが、様々な職業の専門職化を進む中で、その専門職性を保証する大学教育は、授業に出席し、資格を保証する知識の学修が適正に行われていることが重視されるようになってきている。授業担当者でもある教育研究者は、彼らの学修を保証する立場にあり、授業期間中に自身の研究のために長期の海外視察調査を実施し、授業を休むことに正当性はない。夏期や春期の長期の授業休止期間中も校務やFDで状況は変わらない。しかし、現地に行かなくても膨大な資料が入手できると言っても、ファインダー・サイズ、ディスプレイ・サイズの情報や発信者によって編集された情報には限界があり、その情報の妥当性や信頼性だけでなく、真実性を含めて我々研究者は検証し、情報を分析的に再構成しなくてはならず、現地を視察し、実際を観察することの重要性はむしろこれまで以上に高まっている。つまり、大学院生や一部の研究大学に所属する研究者以外のほとんどの教育研究者は、限られた時間の中で有効な現地視察調査を実施し、そこで得た現

地情報を研究に求められる厚いデータとして分析的に活用しなくてはならないのである。けれども、そのための研究手法は確立されているだろうか。そもそもこのような問題意識自体、私たちは持ってこなかったのではないだろうか。

本稿は、以上の問題意識に立って、短期の海外視察を組み入れた教育研究の可能性を検討し、その手法の一つを提示しようというものである。本稿の前半は、冒頭で取り上げた日本教育社会学会の研究において、海外視察データがどのように研究的に取り扱われてきたのかを確認する。取り上げるデータは、『教育社会学研究』に投稿された論文と、年次研究大会において口頭発表された研究報告の発表要旨である。2つを取り上げることは、社会学的な教育研究の手法に大きな関心を注ぎ、その確立のための議論を蓄積してきた教育社会学分野において、研究的な分析として評価される研究を捉えることができ、視察データの取り扱い方に対する教育社会学研究者の意識を推察することが可能になるからである。後半は、私たちが提案する海外視察データの分析方法として、視察した教育現実をその現地社会の教育に関する《語り＝ナラティブ》として読み解く、ナラティブ分析の視角を応用した研究手法を紹介する。

II. 教育社会学研究における海外視察データ紹介の現状と課題

本章では、近年の教育社会学領域における海外視察データの紹介の仕方について検討する。ここでいう海外視察データとは、日本人研究者が海外の文化や社会状況などを究明するために現地を訪問し、フィールドとともにアクターである対象者の観察を伴った質的な調査を行うことによって収集したデータのことである。

2009年から2018年までの過去10年間の状況を捉えるために、日本教育社会学会の大会の『発表要旨集録』（第61～70回大会）に記載されている一般部会、テーマ部会、特設部会の要旨と、『教育社会学研究』（第84～103集）に掲載されている査読論文のなかから、海外視察データを用いたものを抽出し、分類を行った^(注1)。

短期間現地に滞在して収集した観察データとインタビュー・データを用いた研究を「視察インタビュー」、短期間現地滞らないし滞在期間不明で、観察データを使用していない状態、あるいはその使用の有無を文章から判別できない状態で、かつインタビュー・データを用いた研究を「インタビュー」、長期間現地に滞在してフィールドワークを行い収集したデータをもとにした研究を「フィールドワーク」、観察データ、インタビュー・データとともに量的データも用いた研究を「混合（視察含）」、観察データを使用していない、あるいは使用したか判別できない状態で、インタビュー・データと量的データを用いた研究を「混合」、以上の分類にあてはまらない研究を「その他」^(注2)として分類した結果が表1である。

日本教育社会学会大会でこの10年間に報告された上記の分類に該当する海外視察データを活用した研究成果の数は、「その他」を除いて44報告である。平均すると、毎大会4、5本の報告がなされていることになる。研究手法の内訳はインタビュー・データを用いた報告20本、フィールドワーク・データを用いた報告14本、量的・質的データを用いた報告10本となっている。

一方、『教育社会学研究』に掲載された査読論文は3本であり、インタビュー・データを用いた論文1本、フィールドワーク・データを用いた論文1本、質的・量的データを用いた論文1本となっている(表2参照)。それらのうち、前者2論文は、過去10年以内に大会で発表された内容をベースに執筆されたものであった。

また、抽出した要旨と論文のなかで、インタビュー・データの分析方法について言及していることが読みとれる研究は、南アフリカの高校の学習者の語りに注目した報告(65回大会)1本のみであった。

表1 日本教育社会学会大会『発表要旨集録』掲載の海外視察データ活用の報告要旨数

	合計	視察 インタビュー	インタビュー	フィールド ワーク	混合 (視察含)	混合	その他
2009年 第61回大会 於 早稲田大	7	1	3	2	1	0	0
2010年 第62回大会 於 関西大	5	0	2	1	1	1	0
2011年 第63回大会 於 お茶の水女子大	4	0	2	1	0	1	0
2012年 第64回大会 於 同志社大	3	0	0	1	1	1	0
2013年 第65回大会 於 埼玉大	2	0	1	1	0	0	0
2014年 第66回大会 於 愛媛大・松山大	2	2	0	0	0	0	0
2015年 第67回大会 於 駒澤大	6	1	2	2	0	1	0
2016年 第68回大会 於 名古屋大	5	1	1	3	0	0	0
2017年 第69回大会 於 一橋大	5	1	0	2	0	1	1
2018年 第70回大会 於 佛教大	8	1	2	1	0	2	2
合計	47	7	13	14	3	7	3

注)2011年度「インタビュー」については内容が重複するものがあったので、1報告としてカウントした。

表2 『教育社会学研究』掲載の海外視察データ活用の査読論文数

	合計	視察 インタビュー	インタビュー	フィールド ワーク	混合 (視察含)	混合	その他
2009年 第84集	1	0	0	0	0	1	0
第85集	0	0	0	0	0	0	0
2010年 第86集	0	0	0	0	0	0	0
第87集	0	0	0	0	0	0	0
2011年 第88集	0	0	0	0	0	0	0
第89集	0	0	0	0	0	0	0
2012年 第90集	0	0	0	0	0	0	0
第91集	0	0	0	0	0	0	0
2013年 第92集	0	0	0	0	0	0	0
第93集	0	0	0	0	0	0	0
2014年 第94集	0	0	0	0	0	0	0
第95集	0	0	0	0	0	0	0
2015年 第96集	0	0	0	0	0	0	0
第97集	0	0	0	0	0	0	0
2016年 第98集	0	0	0	0	0	0	0
第99集	1	0	1	0	0	0	0
2017年 第100集	0	0	0	0	0	0	0
第101集	0	0	0	0	0	0	0
2018年 第102集	1	0	0	1	0	0	0
第103集	0	0	0	0	0	0	0
合計	3	0	1	1	0	1	0

次に、海外視察データを用いた研究のなかで、そのデータがどのように取り扱われているのかということについて確認しよう。一つの目的を達成するためにそのデータが使用されている研究があれば、複数の目的に達するためにそれが使用されているものもある。データの使用目的は主に5つに分類できる。

第一は、現地の教育政策が当地の人々に及ぼしている影響を究明することを目的とするものである。例えば、ドイツにおける学校終日化が学校と親の関係をどのように変容させるのか(61回大会)、トルコにおけるムスリム女性移民のノンフォーマル教育がどのような成果をあげているのか(63回大会)、アメリカにおける共通コア州スタンダードが学校にどのような影響を及ぼしているのか(65回大会)といった研究がこれに該当する。

第二は、現地の教育に関する問題が起こった要因を究明するものである。ウズベキスタン政府が、政治的緊張関係が顕在化した時期にイスラームの名をつけた宗教系の大学を創設した理由(61回大会)や、アメリカにおける地域生活支援のCommunity Development Corporationがあるプログラムを8年で撤退した理由を検討した研究(63回大会)などがある。

第三は、現地の教育の実際を紹介するものである。カリフォルニア大学における大学教員養成研修コース(61回大会)やイギリスの放課後活動(64回大会)などの制度や取り組みの紹介、ICT利活用を行っているヨーロッパの教育実践(68回大会)やイギリスのインクルーシブ教育の実践(69

回大会)の把握、モンゴルにおける小学校の概要と子どもや保護者の状況の把握(70回大会)などがあげられる。

第四は、現地の教育プログラムに対する人々の意識を明らかにするものである。国際理解教育に対する中国やアメリカの生徒の意識(63回大会)、バングラディッシュにおける代替的な基礎・初等教育プログラムに参加している子どもと家族の意識(69回大会)、ドイツにおけるベトナム系移民などに対する受け入れ側の意識(70回大会)などがある。

第五は、教育施策に関わる人々の行為の変容を捉えようとする研究である。ベトナムにおける貧困世帯の児童が経済活動に従事しつつも教育機会を獲得していくプロセス(61回大会)、アメリカにおけるエスニック学生組織の歴史(61回大会)や保護者の学校選択プロセス(62回大会)、ベトナムにおける休学経験者の休学から復学に至るまでの学習意欲や学習態度の変化(63回大会)などがある。

以上のように、海外視察データを用いた研究が明らかにしようとしているものは多岐に渡っている。けれどもそれらの研究に共通の特徴として、現地社会の外部にいる日本人研究者が現地の調査協力者にインタビューし、そこで語られた事実の中に研究の問いに対する回答を見出し、その言葉を結論の証左として取り上げているものが多いことが指摘できるだろう。したがって、インタビューにおいて語られた言葉は、事実として処理されている。つまり、海外視察データの取り扱いとは、実証主義的アプローチによる実在性という特徴を有しているのである。

こうした海外視察データの取り扱い方に対しては、1970年代の「新しい教育社会学」インパクトを受けて1980年代以降、解釈論的アプローチを軸にして質的研究のデータ解釈についての議論を蓄積してきた教育社会学研究にあっては疑問を差し挟まないわけにはいかない。なぜならば、教育社会学では、フィールドワークにおいて収集された観察データやインタビューを通じて収集されたデータに対しては、その実在性を問うことが一般的になっているからである。観察データの実在性を問う立場も、単純な実在としては捉えられないという前提に立つ立場にとっても、観察された事実として記述された事象が纏っている社会的な意味にどのようにアプローチし、分析上の処理を行うのかは大きな課題であり、質的研究、とりわけフィールドワークの方法論の精緻化はこの課題に関わって手続きの具体化を進めてきた。長期間の観察の必要性や観察者のフィールドでの立ち位置、インタビューへのインタビュアーの影響、遡及型インタビューへの構築主義からの批判などの議論は、いずれも観察データを単純に実在として捉えることができないことに基づいている。当然だが、海外視察におけるデータだからそれは実在として捉えてよいという理由は存在しない。にもかかわらず、観察された海外視察データが教育社会学研究において実在として扱われている現状は、それらの教育社会学研究が海外視察データを分析のためのデータとして扱っていないことを示しているのかもしれない。実際、海外視察において観察されたデータを紹介している教育社会学研究の多くは、そのデータを分析するのではなく、解釈を補強する証拠としてそれを用いているケースが多い。しかし、観察された現実とは、対象に関する様々な、そして大量な情報を繋ぎ、多面的な解釈を創出する、意味の総合的な空間を構成する力を持つ。本稿において提案したいものは、こうした観点に

立つ、視察データの分析方法である。

そこで次章では、語られたデータ（観察されたデータや聞き取られたデータ）をどのように捉えることが可能かという問いのもと、語られたデータの可能性を検討する。それは語られたデータが事実かどうかを問うことではなく、語られたデータが総体として表象する社会的事実に迫る手法を検討する作業である。重要なことは事実か否かではなく、いずれにあっても、語られたデータを通して浮かび上がるリアリティなのである。

III. 社会学的分析の手法

「フィールドワーク」「インタビュー」「視察インタビュー」により収集された海外視察データは、当然のことながらほとんどの場合、研究者にとって非ネイティブ言語のデータである。もちろん研究者の方がネイティブである場合もあるが、その場合は読者やオーディエンスが非ネイティブとなる。

したがって、インタビュー・データは「翻訳」として、（日本語を母語とする研究者にとっては）あたかも日本語で話されたものとして扱われることになる。そして、翻訳されたインタビュー・データコーパスから、恣意的にはいわないまでも一部を切り取って、研究全体のストーリーに合うように嵌め込む手法が、これまでの海外視察データの扱い方であった。こうしてネイティブのデータは、翻訳と切り取りという二重の加工を被ることになってしまう。

切り取りという手法は、海外視察データに限らず、ネイティブによるインタビュー・データにおいても一般的に用いられてきた。これに対して、特に医療・看護学の研究領域では、2000年前後から質的データの「厳格な」分析方法が用いられるようになった。こうした手法は、本稿がカバーしようとする教育社会学では必ずしも流通しているとはいえないが^(注3)、質的データをより客観的に扱おうとする質的分析法の代表がG T A (Grounded Theory Approach) (戈木, 2005; 2006) とM-G T A (Modified Grounded Theory Approach) であると言えるだろう (木下, 1999; 2003)。教育社会学領域で、これらを跳び越す形で分析方法として用いられるようになっているのが、インタビュー・データなどのテキスト・データに量的な処理を施すテキストマイニングである。「質的な方法」と「量的な方法」との関係は、長年にわたって議論されてきたが、テキストマイニングは量的な方法であるので (樋口, 2014; 松村・三浦, 2014; 末吉, 2019), その手法の開発と普及によってインタビュー調査を始めとするデータの処理は劇的に変貌したとあってよいだろう。

このようにインタビュー・データを分析する方法が発展してもなお、海外視察で得られたインタビュー・データの分析には高い障壁が存在する。というのも、外国語の一個の単語がもつニュアンス、「含み」、イディオム、シノニム、パラディグム、意味の輻輳、共起表現の全体、その言語特有の発話行為、連想される歴史的・文化的事柄などを、非ネイティブの研究者が視野に収めることが相当なレベルの言語習熟および文化的習熟を必要とするからである。インタビューのデータコーパスを、たとえ厳格な質的手法またはテキストマイニングによって処理しようとしても、このような問題に直面することは想像に難くない。

非ネイティブ言語のインタビュー・データ分析のために、研究者としての修練と同程度の文化的修練が必要とされるとしたら、この領域の研究は非常に困難を伴うことになるだろう。それゆえ、海外視察によって得られたインタビュー・データは、上に述べた二重の加工を施すしかなく、近似的なデータとして研究のストーリーに組み込まれるのが最善ということになるだろう。

このような原理的な検討を推し進めていくと、たとえネイティブの語り手であっても、研究者と本当に言語を共有しているのか、という疑問に行き着くであろう。非行少年、反学校的な生徒や暴走族にインタビューする社会学者は、表面的にはネイティブの言語をもって質問し、聴取し、「理解」し、記録する。質的分析方法を行う研究者の方法的習熟は、まさにこの「理解」にかかっているということは、これまでの質的研究の方法論が述べてきたことであつた。

社会学における質的方法は、一般的には1930年代の「シカゴ学派」に起源をもつとされる。たとえば、ウィリアム・トマスとフローリアン・ズナニエツキ (Thomas and Znaniecki, 1918-1920) は、アメリカに移民してきたポーランド農民が、アメリカの生活にどのように適応し定着していくかについて、手紙・自伝記録 (生活史)・新聞記事・裁判記録・各種組織 (社会福祉機関・移民協会・教区教会) の記録 (document) を用いて明らかにした。ここでは、インタビューはデータとして中心的な地位を得ていないものの、その後、ネルス・アンダーソン (Anderson, 1923) は、ホームレス地域で実際にホームレスとともに生活して、インタビューと参与観察、個人ドキュメントにより、ホームレス社会の構造を記述し、生活環境とその主観的意味づけを分析した。クリフォード・ショウ (Shaw, 1930) は、ある非行少年との16歳から6年間にわたる付き合いから、その経歴 (生育歴・犯罪歴・拘置歴) を聞き出して生活史としてまとめ、非行少年 (ジャック・ローラー=酔っ払いや同性愛男性を路地などに連れ込み金品を奪う犯罪者) の世界観、役割の認知、文化的社会的背景との関連を明らかにした。これ以外に、シカゴ学派第二世代であるウィリアム・ホワイト (Whyte, 1943) の研究、イギリスのカルチュラル・スタディーズの研究者であるポール・ウィリス (Willis, 1977)、ディック・ヘブディジ (Hebdige, 1979) の研究もまた、インタビューを用いた代表的な社会学研究として位置づけられるであろう。日本における代表的な研究として、佐藤郁哉による暴走族へのフィールドワーク・インタビュー調査がある (佐藤, 1984)。

このように、質的調査法は、インタビューを単独ではなく、他のデータ (経歴、ドキュメントなど) と組み合わせ対象者の「生活史 (life history)」を組み立てる。対象がどのような主観的世界において、どのような意味連関 (relevance) のもとに生きているのかを再構成しようとするのである。

シカゴ学派の研究から発して、インタビュー・データを分析の中心に据えたのが、その後裔といえるシンボリック相互作用論のハーバート・ブルーマーらであつた。特に、バーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスは、「グラウンデッド・セオリー (grounded theory)」によってインタビュー・データの分析を手法として確立した (Glaser and Strauss, 1967)。これは、抽象的な思弁に拠らない、データに基づいた (data-grounded) という意味であるが、かつてライト・ミルズがタルコット・パーソンズらの理論を批判して“grand theory” (誇大理論) と形容した (Mills, 1959)

ものをもじったものであると同時に、パーソンズらが嫌ったシカゴ学派の”grounded”（地べたを這いずり回る）な社会学を、「地に足がついた」という意味へと逆転させて、いくつもの意味を輻輳させた用語である。手法としては、インタビューなどによって得られた文章データ（テキストデータ）を断片に切り分け、コード化と分類を行い、先入見によらないデータ理論構築を目指す。先に述べたGTAは、彼らが提唱した手法を方法的に精緻化したものである（Strauss and Corbin, 1990; 1998）。医療や看護学の領域でこの手法が流通したこと（Chenitz and Swanson, 1986）は、これを用いたグレイザーとストラウスの研究（Glaser and Strauss, 1965）が、ターミナルケアを主題としたことと無縁ではないだろう。GTAは、インタビュー・データから意味を捨象して厳格な切片化を行うのに対して、その修正版であるM-GTAは意味のまとまりを認識しながら、データを再構成する手法である。

全く開発の背景が異なるテキストマイニングを含めて、これらの手法はインタビュー・データを単独で（つまり生活史と切り離して）、分析することを可能にしている。しかし、この節の最初に述べたように、海外視察によって得られたインタビュー・データの分析は、非母語話者である研究者にとって、むしろ困難になってしまうのである。といて、参与観察と個人ドキュメントなども併用して主観的世界を再構成する手法は、多大な時間的資源を要求され、限られた研究費による海外視察研究ではなしえないのも明らかである。こうして議論は一巡して出発点に戻ってしまうように思われる。しかし、本稿は、従来の恣意的な切り取りとも見える技法をより洗練させる道があると考える。それは次節で述べるナラティブ分析である。

IV. ナラティブ分析

社会調査における質的分析としてのナラティブ分析は、少なくとも日本においてはまだ十分にその潜勢力を発揮していない^(注4)。その理由は二つ挙げることができる。第一に、「ナラティブ」という語に関する一種の誤解である。質的な分析法として、ナラティブ分析が取り上げられる場合、日本においては「ナラティブ」は「語り」と訳される。したがって、インタビューはすべて「語り」なのだから、語りを恣意的に切り取ったかのような素朴な手法がナラティブ分析だと誤解されてしまう。では、ナラティブとは何なのか。それが第二の点であるが、ナラティブとは単なる「語られたこと」ではなく「物語」である。ナラティブ分析とは、質的方法に、アリストテレス以来の伝統がある「物語論 (narratology)」の議論を持ち込んだものなのである。この点が十分咀嚼され、そして物語論の蓄積が反映されない限り、インタビュー・データがなぜ物語なのか、そしてナラティブ分析がインタビュー・データに対して何をなしうるかが明らかにならないであろう。

日本における社会学とその関連領域において、ナラティブ (narrative) を有名にしたのは、シーラ・マクナミーとケネス・ガーゲン編『ナラティブ・セラピー』(McNamee and Gergen, 1992: 訳書 1997 は抄訳) であろう^(注5)。編者の二人が、社会構成主義 (social constructionism) を標榜する心理学者であったため、セラピストや家族（「リフレクティング・チーム」）とともにクライアントに自己の物語を構成させる心理療法^(注6)が、行為や社会を主観的意味付けによって構成されるとす

るウェーバーやシュッツ、バーガー&ルックマン、ガーフィンケルなどの伝統と合致するものとして社会学においても受容されたといえるだろう。このような接合は、上掲書の記者の一人である野口裕二による『ナラティブの臨床社会学』においてははっきり示されている（野口 2005）。野口は、ナラティブ・セラピーの前提を、

- ①現実社会的に構成される。
- ②現実言語によって構成される。
- ③言語は物語によって組織化される。

とし、「ナラティブ・セラピーは、「病い」が社会的に構成されるのだとすれば、それは社会的に再構成できるはずだと考える」（野口 同上書：27）としている。ナラティブ・セラピーは、「自己のあり方をクライアントに問いかけ、そこで反省（reflection）によって自己を別の物語の中にあるものとして再定義させるのである。このようなパースペクティブにおいて、「自己のアイデンティティ」とされていたものは、「物語的アイデンティティ」（Anderson and Goolishian, 1992: 訳書65）へと位置づけ直され、自己物語が語られ語られ直される過程で構築されるものとして捉え直される。ホワイトとエプストンは「書き換え（restorying）」という用語を用いて、クライアントが自身の問題を外在化し、うまくいくような別のライフストーリーへと改訂する作業を表現している（White and Epston, 1990）。カウンセラーの役割はこの改訂作業の支援である。精神分析においても、このような手法はシェーファーらによって「語り直し（retelling）」として述べられている（Schafer, 1992）。分析家の役割は、「改訂（reauthoring）」をした物語を「ともに書くこと（coauthoring）」ということになる（注7）。

こうした構成主義的セラピーの立場に対しては、時間的存在としての人間を論じたポール・リクールの名著『時間と物語』が哲学的基盤を提供しているといえる。

固有名詞の不変性を支えるものは何か。その名で指名される行為主体を、誕生から死まで伸びている生涯にわたってずっと同一人物であるとみなすのを正当化するものは何か。その答えは物語的でしかあり得ない。「だれ？」という問いに答えることは、ハンナ・アーレントが力をこめてそういったように、人生物語を物語ることである。物語は行為のだれを語る。〈だれ〉の自己同一性はそれゆえ、それ自体物語的自己同一性（identité narrative）にほかならない。

（Ricoeur, 1983: 訳書Ⅲ 448）

例えば、「令和」への改元が、多くの人に歓迎を持って受け入れられた。これは人々が、改元を、自身の人生にとっても新たな局面が切り開かれたこととして捉えたことを意味していると思われる。バブル崩壊やテロなどの凶悪犯罪、大震災と気候変動などの不安に満ちた平成時代の自己を「新たな自己」に書き換える機会を、改元が提供したのである。

こうして社会変動の中で個人は自己を位置づけなおすのだが、リクールも自己のあり方と関連づけて検討した物語論（注8）が、社会学の中で十分吟味されてこなかったのは、ナラティブ心理学と社

会学の意外なほどの近さにあるといってもいいかもしれない。ナラティブ心理学が、社会構成主義という前述の社会学的伝統と共通の基盤をもっていたため、肝腎の「物語 (narrative)」の研究を省略しても、ナラティブのセラピー的効果は受容可能であった^(注9)。

物語論の起源は、アリストテレスの『詩学』にまでさかのぼれるが (Ricoeur, 1983)、ナラティブ分析との関係においては、トマシェフスキーをはじめとする 1920 年代のロシア・フォルマリスト、特にヴラディミール・プロップの研究 (Пр о п п, 1928) から始めるのが適切であろう。プロップは、アフアナシエフ『ロシア民話集』中の 100 編の魔法物語を対象として、物語を「機能 (プロットのパタン)」と「登場人物の行動領域」へと抽象化した。そして、普遍で恒常的な機能として「別離」「禁止」「違反」などの 31 を、また登場人物の類型として「敵対者」「贈与者」「主人公」など 7 つを抽出し、それぞれの登場人物が 1~6 の機能を有していることを示した。こうしてプロップは、物語が諸機能の連鎖として構成されているとしたのである。プロップの議論は、フランスにおいてさらなる精緻化をされることになった。第一に、機能の連鎖は固定的なものではなく、三つの契機 (潜在性・現実化・結果) における二者択一によって展開するとしたクロード・ブレモンの議論である (Bremond, 1973)。第二に、アンドレ・グレマスは、同じくプロップの行為者を、欲望・伝達・闘争という三つの関係と、物語中の行為者レベルを設定することにより精緻化した (Greimas, 1966)。グレマスはさらに、物語の継起を、措定された内容/倒置された内容、否定/肯定という二つの選択肢の組によって構造化することで、意味の四辺形による物語分析を可能にした。第三に、物語中の出来事の時間的前後関係に注目して、「語られる物語内容」と「語る物語」とのねじれを類型化したジェラルド・ジュネットの物語論 (Genette, 1973)。ジュネットはさらに、叙法と態の類型化も行っている。第四に、物語論に様々な提案を行ったロラン・バルトは、物語の核または枢軸機能に対して、副次的要素または触媒機能を区別して、さらにさまざまな指標が用いられることを論じている (Barthes, 1966)。これらに先立つ形で、レヴィ=ストロースはプロップよりもヤコブソンに依拠しながら (したがって物語論の枠組みで語られることはより少ないが)、自らの収集した神話に「意味の三角形」を適用することで、神話の構造を見出している (Lévi-Strauss, 1964 - 71)。

これらフランスの物語論は、大まかに総括するならば、物語の法則を見出すことに主眼があるといえるだろう。このことは、語られるナラティブがいかに多様であろうとも、それらは法則性をもって構築されるために、それぞれ類似したものへ成形されるということである。しかし、物語が有限なものだということは、大きなメリットももたらす。すなわち、物語はどのような言語使用者にとっても理解可能だということである。第3節の冒頭に述べた二重の加工による理解不可能性は、語りが物語である限り、物語として理解可能だということによって解消するのではないかと考えられるのである。

しかし、これらフランスの物語論が研究対象としたのは、たとえ語られたことがあるとしても、多くは書かれたもの (テキスト) であり、インタビューで語られた発話の分析は難しいのではないかという懸念も生じる。この点について、アメリカの社会言語学者ウィリアム・ラボフらは、都市の黒人の話し言葉を分析し、語りを①要約、②方向づけ (指示)、③紛糾 (展開)、④評価、⑤解決

(結果), ⑥終結部の連鎖という要素連続として捉えた (③⑤以外の要素は任意とされる) (Labov and Waletzky, 1967; Labov, 1972) (注10)。これらの要素連続の構造は, フランスの物語論と整合的なものであり (Adam, 1984), 書かれようが語られようがそれは物語として捉えられる。

どれほどささやかな物語であっても, それは必ず事件の時間的な連続以上のものである。物語る活動は時間の秩序と組織の秩序とを結合している。一つの話の展開 (時間の秩序) をたどることはすでに, そこに起こる諸事件を反省的な判断行為によって一つの有意味の全体 (組織の秩序) として見通すために, それらの事件について考えることである。(Adam, 1984: 訳書 27)

ナラティブが, 時間 t に起きた〈出来事A〉と時間 $t+n$ に起きた〈出来事B〉との関連づけである限り, 物語論が用意した諸概念・諸関係の原理・法則によって説明することができるのである。

V. 海外視察データのナラティブ分析

語りをナラティブとして分析することはそれゆえ, 単に語りの一部を取り出して, 主観的な論評を加えたり, 研究のストーリーに合わせたりすることではない。物語論の諸概念を借りながら, 客観的な物語構造を明らかにすることは, 研究者が母語話者かどうかにかかわることはないため, 海外視察データ分析の有用な手段となりうる。一連の意味連関としての物語をインタビュー・データコーパスから取り出すことができたとき, 翻訳・通訳不能性を越えて, 非ネイティブ文化においても了解可能なものになるのである。このような意味において, 「ナラティブ分析」は, 母語話者ではない研究者によるインタビュー・データの分析において, 有効な方法であろうと思われる。インタビュー・データを実証的なかたちで, あるいは厳密なかたちで扱うことができないことは, ナラティブ分析の手法を採用する限り問題ではない。先に述べたようないくつかの質的方法の客観主義的アプローチによっては, 逆にこの点は明らかにならない可能性もある。

ではナラティブ分析は, どのように語り手のナラティブを分析しうるのか, 以下に比較的単純な構造をもった事例を示しながら検討してみたい。本来のナラティブ分析では, インタビュー・データのコーパスを示しながら分析を施すのだが, 本稿では紙面の制約上, データの断片を抜き書きとして示さざるを得ない。

まず, 2019年3月に行ったチェコ共和国でのインタビューを以下に示す。学校教育と教師教育において, クリティカル・シンキングが重要であるという意見が得られたので, なぜ必要なのかを問うた際の返答である (越智・川村・加藤・紅林, 2020)。

【1】教師が物事を理解して子どもに積極的に物事を変える姿勢を育てることが重要だと思います。・・・物事を変えることが可能だと思える子どもを育てることです。(カレル大学教員)

【2】生徒一人ひとりが考えることができる能力や技術を身につけられるようにするためです。

一つの出来事は価値が違っていると別様に見えます。ある集団の見方が影響していたことを理解し、一つの解決法だけでなくいろいろな解決法があることを知ることができるようになるためです。

(プラハ国立研究所研究員)

【3】 ぼくの世代がもっている知識は、今の子どもはもっていません。メディアが教えたらそのまま信じてしまう。歴史が上書きされるので、40年前の社会主義政権の時と同じようになってしまいます。(カレル大学教育学部学生)

既存の常識的なものの見方を無批判に受け入れず、発見に結びつくような思考方法である「クリティカル・シンキング」が、チェコが経験してきた苦難（社会主義時代の国家イデオロギー）に対する武器として位置づけられているのがわかる。【1】においては、「物事を変える」という控えめな表現にとどまっているが、【2】では「ある集団の見方が影響していたことを理解」するための道具、【3】においては、「40年前の社会主義政権」のイデオロギーと、現在のマスメディアの流布する情報とが重ね合わせられている。

こうして

(歴史・過去)	(現在・未来)
社会主義イデオロギー	クリティカル・シンキング
無知・従順な自己	惑わされない主体
大きな代償	未来への展望

という対立構造のもと、ナラティブが組織されていることがわかる。

同じく 2019 年 3 月にチェコの隣国であり、かつては統合国家を形成していたスロバキア共和国でのインタビューを以下に示す。望ましい市民像の質問に対する返答である（【4】のみ越智・川村・加藤・紅林，2020；【5】～【7】はコーパスより）。

【4】 一つ目は道徳を理解することです。自分の自由を理解しながら他者の自由も理解する。自分の意見をちゃんともつが他の人の意見をちゃんと聞いてほしい。そうすれば自分の意見を変えることができると思います。メディアについても誰が何を言っているかに注意しながら自分の意見をもつことが必要です。(基礎学校教員)

【5】 広い心をもった教員になってほしい。新しい動向に対して敏感である必要はあるが、古いものを捨ててはいけない。過去にあったことを忘れないようにしてほしい。(基礎学校教員)

【6】 共産主義時代のような経済（労働市場）と教育の関係は、現在再び現れてきています。学校

に対する企業の影響が再び現れているのです。(スロバキア教育省幹部)

【7】スロバキアはかつて物づくりの国でしたが、これからはオートメーションによって労働市場は変化します。危機がもたらされるかもしれません。われわれは、OECD の助けを借りてスキルアップの戦略を取ろうと考えています。(同上)

こうして

(歴史・過去)	(現在・未来)
経済的安定・伝統	経済体制の変化・マスメディアの発達
道徳的自己	危機への対処・戒め
着実さ	守るべき伝統の再発見

という対立構造のもと、ナラティブが組織されていると解釈される。

このようにしてインタビューの中からナラティブを抽出していく作業は、まず「ポストモダン」もしくは「後期近代」にあって重要である。ジャン＝フランソワ・リオタール (Lyotard, 1979) がポストモダンを定義して述べた「大きな物語の失墜」と「局所的ゲーム」は、個々人の語りの中に「自己物語」として出現していく。あるいは、アンソニー・ギデンズが述べた「再帰的自己」(Giddens, 1991; 1992) もまた、自己物語とその書き換えを必要としている。これら脱近代の特徴を外からではなく、その中で生きる人々の視点において見る場合、こうした自己物語は、病いと癒しの関係として現われるであろう (Frank, 1995)。

筆者らが行っている中欧・東欧における旧共産圏でのインタビュー調査においては、チェコにおいてはソビエト連邦による旧共産圏に対する支配は、忌まわしい過去として語られたのに対し、スロバキアにおいて共産主義は、今よりもよかった記憶として語られた。ポストモダン (後期近代)、さらにグローバル経済という社会変動が、旧共産主義体制下での記憶の物語によって語られるのである。旧東ドイツの都市 (ドレスデン) での調査においては、ナチスドイツの忌まわしい物語の層がさらに下に存在していた。トルコでの調査では、広大な領土を誇っていた多民族国家の記憶、その上に英雄アタテュルクの物語が存在していた。国によっては、植民地としての抑圧の物語、民族的・宗教的対立による分断や迫害の物語などが書き加えられるであろう。それらは、物語構造をもつがゆえに、非ネイティブによるインタビュー・データにおいて、了解可能なのである。こうした20世紀的な物語に対して、グローバル化による市場主義経済のマクロな変動は、まだ固有の物語が形成されていないように思われる。その状況が、依然として20世紀的な物語によって語られることによる問題を抽出することにおいても、ナラティブ分析は効果があるだろう。

また、集合的記憶 (Halbwachs, 1950) が、想像された国家の「記憶」(Anderson, 1983) へと改変されることはよく知られている。個人においても記憶は改変される。個人の記憶とは、「自己相互作用」(Blumer, 1969) として、自己に対して語られるために次第に変化を生じる。集団の記憶もま

た、語られるたびに変化していく。憎悪と復讐の物語、啓示的な物語を作り出す記憶の政治（橋本，2016）やアイデンティティの政治（Kenny，2004）を，批判的に捉え直すこともナラティブ分析が可能にするものなのである。

VI. おわりに —社会的現実へのナラティブ・アプローチのために

ナラティブ・アプローチは，インタビュー・データの分析方法として発展してきた。本稿は，そのナラティブ分析という社会的現実へのアプローチの方法を，観察されたデータのすべて，即ちインタビュー・データだけでなく，フィールドワークや視察によって観察され，記録された事象の全てに援用することを提案するための基礎研究である。

社会的事実として記述される観察されたデータは，当該社会によって表出された社会自身の姿であり，それ故に相互に何らかのレリヴァンスを持っている。しかし，社会は多面的であり，観察者のまなざしはそのすべてを網羅的に観察できているわけではない。これは量的な問題というよりも，そのレリヴァンスが多面的かつ多層的に，観察の中で構築されるものだからである。このレリヴァントな観察において，観察の主観性と客観性とを区別する議論は意味をなさない。何をレリヴァンスとして語られているのかを指し示すことが重要だからである。主観性が根拠となった観察はその観察者の主観とのレリヴァンスにおいてどのような社会的事実が語られているかが，その語りを再構成する作業において主題化されなければならない。つまり，ナラティブ・アプローチは不断かつ永遠に社会的出来事を社会的事実として再構築し続ける科学的観察の循環の中に，観察された社会的事実を一つのナラティブとして提示する作業なのである。社会科学的な社会の観察においてインタビューが重視されてきたのは，主体システム自らが自らの語りの中で自らのナラティブを構成し，主体化されたナラティブを観察可能なものとして指し示しているからである。インタビュー・データは，主体システムのナラティブへの社会科学的接近の素材として高い語り直し可能性を持つのである。けれども，主体システムによって主体化されたナラティブであるということは，そのナラティブの限界でもある。それはより多面的，多層的な社会的文脈の中で再構成されなければならないのである。

本稿が取り上げてきた海外視察研究は，ナラティブを第一次的に創出している主体システムと異なる社会を意味の地平として持つ，非ネイティブによる観察であるが，この非ネイティブによる観察は，主体システムによる主体化されたナラティブに異質なレリヴァンスを発見する作業と言える。それは，主体システムと観察者の関係を社会のレベルで語り直す作業と言えるだろう。主体化されたナラティブは，その外延で語られないものとして表象されているレリヴァンスを発見し，新たなフレームの中で語り直されるのである。

以上のことをまとめれば，ナラティブ・アプローチは唯一の真実に至る研究手法ではなく，語り直し可能性の高いナラティブを指し示すアプローチであり，これがセラピーの分野で発展してきた所以であると言える。ナラティブ・アプローチによる社会科学研究は社会のセラピーなのである。

【注】

- (1) 特殊な立場にある個人のモノグラフを書くことを目的とした研究やオンラインによる調査協力者に対するインタビュー調査データにもとづいた研究は、抽出の対象外とした。
- (2) 海外に関する量的研究ではないものの研究手法の判別がつかない研究、外国人研究者に対する理論研究に関するインタビュー調査を伴う研究、世界各地の組織や国際機関の職員、研究者といった世界の多様な人々を対象にしたインタビュー調査と伴う研究を分類した。
- (3) この領域の代表的な質的分析法のリーディングズである北澤・古賀（1997）ではこの手法についての説明はない。北澤・古賀（2008）では、古賀（2008）が「構築主義的エスノグラフィー」の手法を紹介するなかで、グラウンデッド・セオリーについて「客観主義的エスノグラフィー」として言及しているが、分析の実例は示されていない。
- (4) 瀬戸（1997）は比較的早いナラティブ分析の紹介であり、物語論と関連領域における研究が概観されるとともに、ポーキングホーン（Polkinghorne, 1988）、リースマン（Riessman, 1993）、コータッツィ（Cortazzi, 1993）の研究が紹介されていて有益だが、実際の分析例はカスパー・ハウザーにかかわる物語群の物語論による分析である。先述の古賀（2008）も、構築主義的エスノグラフィーとしてナラティブ分析を推奨しているわけではない。
- (5) ただし、原著のタイトルは、Therapy as Social Construction（社会的構成としての治療）であり、少なくとも翻訳された論文において「ナラティブ・セラピー」という語は用いられていない。原題に「ナラティブ・セラピー」を用いる文献もあるが、構築主義的なスタンスは、単に新たなセラピーとしてだけでなく、心理学の既成概念の批判も含むので、欧米では「ナラティブ・セラピー」よりも「ナラティブ心理学（narrative psychology）」と呼ばれるのが一般的である（Sarbin 1986; Crossley, 2000）。
- (6) 実際のカウンセリング記録におけるナラティブ分析の事例は、クロスリー（Crossley, 2000）訳書 121 頁以降を参照。
- (7) このような書き換えは、全くの虚構に変質してしまわないよう一定の展望のもとに置かれなくてはならないことを、スペンス（Spence, 1982）らは注意している。
- (8) 物語論の概要と詳細は、J.-M. アダム（Adam, 1984）や、マルティネスとシェフェル（Martinez und Scheffel, 1999）、橋本（2014; 2017）などを参照。
- (9) 例えば、野口（2005）は著書の中では物語論には言及していない。
- (10) イェルガコポロ（Georgakopoulou, 2011）は、主として会話分析からのラボフ批判を検討しながらも、会話分析が主張するような会話の形式的秩序の検討のみでは不十分であるとして、会話の内容としての物語の分析の必要性を主張している。

【引用・参考文献】

Adam, Jean-Michel (1984) *Le récit*, Presses Universitaires de France. (=2004, 末松壽・佐藤正年訳『物語論 プロップからエーコまで』白水社 [文庫クセジュ].)

- Anderson, Benedict (1983) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (=2007, 白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早川.)
- Anderson, Nels (1923) *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, University of Chicago Press. (=1999, 広田康生訳『ホーボー ホームレスの人たちの社会学 上・下』ハーベスト社.)
- Anderson, Harlene and Harold Goolishian (1992) “The Client is the Expert: a Not-Knowing Approach to Therapy” in McNamee and Gergen eds., 25-39. (=1997→2014, 野口裕二・野村直樹訳「クライアントこそ専門家である」『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』金剛出版→遠見書房.)
- Barthes, Roland (1966) “Introduction à l’analyse structurale des récits”, *Communication*, 8. (=1979, 花輪光訳「物語の構造分析序説」『物語の構造分析』みすず書房, 所収, pp. 1-54.)
- Blumer, Herbert (1969) *Symbolic Interactionism. Perspective and Method*, Prentice-Hall. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』勁草書房.)
- Bremond, Claude (1973) *Logique du récit*, Seuil.
- Chenitz, W. Carole and Janice M. Swanson eds. (1986) *From Practice to Grounded Theory. Qualitative Research in Nursing*, Addison-Wesley. (=1992, 樋口康子・稲岡文昭監訳『グラウンデッド・セオリー 看護の質的研究のために』医学書院.)
- Cortazzi, Martin (1993) *Narrative Analysis*, The Falmer Press.
- Crossley, Michele L. (2000) *Introduction Narrative Psychology. Self, Trauma and the Construction of Meaning*, Open University Press. (=2009, 角山富雄・田中勝博監訳『ナラティブ心理学セミナー 自己・トラウマ・意味の構築』金剛出版.)
- Frank, Arthur W. (1995) *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, The University of Chicago Press. (=2002, 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手 身体・病・倫理』ゆみる出版.)
- Genette, G. (1972) *Figures III*, Seuil. (=1985, 花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』書肆風の薔薇; =1987, 花輪光監訳『フィギュールIII』書肆風の薔薇.)
- Georgakopoulou, Alexandra (2011) “Narrative Analysis”, in Ruth Wodak, Barbara Johnstone & Paul Kerswill eds., *The SAGE Handbook of Sociolinguistics*, Sage Publication, 396-411. (=2013, 佐藤彰・秦かおり・岡本多香子訳「ナラティブ分析」佐藤・秦編『ナラティブ研究の最前線 人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房, 1-42.)
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Giddens, Anthony (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Stanford University Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳『親密性の

- 変容 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss (1965) *Awareness of dying*, Aldine. (=1988, 木下康仁訳『死の Awareness 理論と看護 死の認識と終末期ケア』医学書院.)
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss (1967) *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*, Aldine. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見 調査からいかに理論を生み出すか』.)
- Greimas, A. J. (1966) *Semantique structural*, Larousse. (=1988, 田島宏・鳥居正文訳『構造意味論』紀伊國屋書店.)
- Halbwachs, Maurice (1950) *La mémoire collective*, Albin Michel. (=1989, 小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社.)
- 橋本伸也 (2016) 『記憶の政治 ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店.
- 橋本陽介 (2014) 『ナラトロジー入門 プロップからジュネットまでの物語論』水声社.
- 橋本陽介 (2017) 『物語論 基礎と応用』講談社.
- Hebdige, Dick (1979) *Subculture. The meaning of style*, Routledge. (=1986, 山口淑子訳『サブカルチャー スタイルの意味するもの』未来社.)
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- Kenny, Michael (2004) *The Politics of Identity. Liberal Political Theory and the Dilemmas of Difference*, Polity. (=1986, 藤原孝・松島雪江・佐藤高尚・山田竜作・青山円美訳『アイデンティティの政治学』日本経済評論社.)
- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実証研究の再生』弘文堂.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂.
- 北澤毅・古賀正義編 (1997) 『〈社会〉を読み解く技法 質的調査法への招待』福村出版.
- 北澤毅・古賀正義編 (2008) 『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社.
- 古賀正義 (2008) 「構築主義的なエスノグラフィーを实践する」北澤毅・古賀正義編『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社, 153-177.
- Labov, William (1972) *Language in the Inner City: Studies in Black English Vernacular*, University of Pennsylvania Press.
- Labov, William and Waletzky, J. (1967) "Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience", in J. Helm ed., *Essays on the Verbal and Visual Arts*, University of Washington Press.
- Lévi-Strauss, Claude (1964 -71) *Les mythologiques*, Plon. (=2006, 早水洋太郎訳『生のもとは火を通したもの 神話論理 I』; 2007, 早水洋太郎訳『蜜から灰へ 神話論理 II』; 2007, 渡辺公三・榎本譲・福田素子・小林真紀子訳『食卓作法の起源 神話論理 III』; 2008, 吉田禎吾・木村秀雄・中島ひかる・廣瀬浩司・瀧浪幸次郎訳『裸の人 神話論理 IV-1, IV-2』みすず書房).

- Lyotard, Jean-François (1979) *La Condition postmoderne: Rapport sur le savoir*, Minuit.
(=1986→1994, 小林康夫訳『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』書肆風の薔薇→水声社).
- Martinez, Matias und Michael Scheffel (1999) *Einführung in die Erzähltheorie*, C.H. Beck.
(=2006, 林捷・末長豊・生野芳徳訳『物語の森へ 物語理論入門』法政大学出版局.)
- 松村昌宏・三浦麻子 (2014) 『人文・社会科学のためのテキストマイニング』誠信書房.
- McNamee, Sheila and Kenneth J. Gergen eds. (1992) *Therapy as Social Construction*, Sage Publication. (=1997, 野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践』金剛出版.)
- Mills, C. Wright (1959) *The Sociological Imagination*, Oxford University Press. (=2019, 伊奈正人・中村好孝訳『社会学的想像力』筑摩書房 (ちくま学芸文庫).)
- 日本教育社会学会第61回大会実行委員会 (2009) 『日本教育社会学会第61回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第62回大会実行委員会 (2010) 『日本教育社会学会第62回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第63回大会実行委員会 (2011) 『日本教育社会学会第63回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第64回大会実行委員会 (2012) 『日本教育社会学会第64回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第65回大会実行委員会 (2013) 『日本教育社会学会第65回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第66回大会実行委員会 (2014) 『日本教育社会学会第66回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第67回大会実行委員会 (2015) 『日本教育社会学会第67回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第68回大会実行委員会 (2016) 『日本教育社会学会第68回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第69回大会実行委員会 (2017) 『日本教育社会学会第69回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会第70回大会実行委員会 (2018) 『日本教育社会学会第70回大会要旨集録』.
- 日本教育社会学会編集委員会編 (2009a) 『教育社会学研究』第84集.
————— (2009b) 『教育社会学研究』第85集.
————— (2010a) 『教育社会学研究』第86集.
————— (2010b) 『教育社会学研究』第87集.
————— (2011a) 『教育社会学研究』第88集.
————— (2011b) 『教育社会学研究』第89集.
————— (2012a) 『教育社会学研究』第90集.
————— (2012b) 『教育社会学研究』第91集.
————— (2013a) 『教育社会学研究』第92集.
————— (2013b) 『教育社会学研究』第93集.
————— (2014a) 『教育社会学研究』第94集.
————— (2014b) 『教育社会学研究』第95集.
————— (2015a) 『教育社会学研究』第96集.
————— (2015b) 『教育社会学研究』第97集.

- _____ (2016a) 『教育社会学研究』第98集.
- _____ (2016b) 『教育社会学研究』第99集.
- _____ (2017a) 『教育社会学研究』第100集.
- _____ (2017b) 『教育社会学研究』第101集.
- _____ (2018a) 『教育社会学研究』第102集.
- _____ (2018b) 『教育社会学研究』第103集.
- 日本教育社会学会広報部 (2011) 『日本教育社会学会会報』No. 154.
- 野口裕二 (2005) 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房.
- 越智康詞・川村光・加藤隆雄・紅林伸幸 (2020) 「チェコとスロバキアにおける市民性教育—学校カリキュラムの自律性を巡る語りの違いから見えてくるもの—」『信州大学教育学部研究論集』第14号 (掲載予定).
- Polkinghorne, Donald E. (1988) *Narrative Knowing and the Human Science*, State University of New York Press.
- Пропп, Владимир Яковлевич (1928) *Морфология Сказки*, Academia. (=1987, 北岡誠司・福田美智代訳『昔話の形態学』水声社.)
- Ricoeur, Paul (1983) *Temps et récit, Tome I-III*, Seuil. (=1987, 久米博訳『時間と物語 I ~III』新曜社.)
- Riessman, Catherine Kohler (1993) *Narrative Analysis*, Sage Publications.
- 戈木クレイグヒル滋子編 (2005) 『質的研究方法ゼミナール グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ』医学書院.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 理論を生み出すまで』新曜社.
- Sarbin, T.R. ed. (1986) *Narrative Psychology. The Storied Nature of Human Conduct*, Praeger.
- 佐藤彰・秦かおり編 (2013) 『ナラティブ研究の最前線 人は語ることで何をなすのか』ひつじ書房.
- 佐藤郁哉 (1984) 『暴走族のエスノグラフィー モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社.
- Schafer, R. (1992) *Retelling a Life. Narration and Dialogue in Psychoanalysis*, Basic Books.
- Schutz, Alfred and Zaner, Richard M. (1970) *The Refrctions on the Problem of Relevance*, Yale University Press. (=1996, 那須寿, 今井千恵, 浜日出夫, 入江正勝 訳『生活世界の構成—レリヴァンスの現象学』マルジュ社)
- 瀬戸知也 (1997) 「映像テキストと物語的アプローチ」北澤毅・古賀正義編『〈社会〉を読み解く技法 質的調査法への招待』福村出版, 116-138.
- Shaw, Clifford R. (1930) *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*, University of Chicago Press. (=1997, 玉井真理子・池田寛訳『ジャック・ローラー ある非行少年自身の物語』東洋館出版社.)
- Spence, D. (1982) *Narrative Truth and Historical Truth*, Norton.

- 末吉美喜 (2019) 『テキストマイニング入門: Excel と KH Coder でわかるデータ分析』 オーム社.
- Strauss, Anselm L. and Juliet Corbin (1990) *Basics of Qualitative Research. Grounded Theory: Procedures and Techniques*, Sage Publications. (=1999, 南裕子監訳『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー技法と手順』医学書院.)
- Strauss, Anselm L. and Juliet Corbin (1998) *Basics of Qualitative Research. 2nd ed.*, Sage Publications. (=2004, 操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』医学書院.)
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki (1918-1920) , *The Polish Peasant in Europe and America*, (=1983, 桜井厚訳『生活史の社会学 ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房. [抄訳])
- White, Michael and David Epston (1990) *Narrative means to Therapeutic Ends*, Norton Professional Books. (=2017, 小森康永訳『物語としての家族』金剛出版.)
- Whyte, W. F. (1943→1993) *Street Corner Society. 4th ed.*, University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣.)
- Willis, Paul (1977) *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Saxon House; Collier Macmillan. (=熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども 学校への反抗 労働への順応』筑摩書房, 1985年; ちくま学芸文庫, 1996年.)

【謝辞】本研究はJSPS科研費JP16H03788, JP17H02672の助成を受けたものである。

Abstract

The purpose of this study is to consider the possibility of educational research on short-term overseas school visits using a narrative approach as one of the methods of analysis. In accordance with the Japan Society of Educational Sociology, the observation data from the overseas school is treated as reality. First, we pointed out the following. In the research of the Japanese Society of Educational Sociology, the observation data from the overseas school is treated as reality. Therefore, the data in this study is described as events of observed reality and not analyzed for the social meaning of the phenomenon. Second, we introduced narrative analysis, which was used to understand the reality of the educational phenomenon observed as the narrative related to the education in the local community.